

英語科の問題解決学習における「非認知的能力」と「教科・領域特有の資質能力」の高まりと影響

杉山 貴哉* 建内 高昭**

*附属岡崎小学校

**外国語科教育講座

Enhancement and influence of “Non-Cognitive Skills” and “Subject Qualities and Abilities” in Problem Solving Learning in English class

Takaya SUGIYAMA*, and Takaaki TAKEUCHI**

*Okazaki Elementary School Affiliated to Aichi University of Education, Okazaki 444-0072, Japan

**Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Keywords : 問題解決学習 非認知的能力 教科・領域特有の資質能力

I 「豊かに生きる」子どもを求めて

附属岡崎小学校では、大正時代から受け継がれる生活教育の理念を大切にしてきた。大槻(2022)では、「生活教育とは、生活のなかでの経験を通して、生活をよりよいものにしていくために必要な資質・能力を自ら学び取り、人間性を豊かにしながら、自分の生活を深め・広げていく創造的・発展的な教育活動である」としており、この生活教育の理念を具現するために、問題解決学習を展開してきた。これからの予測困難な時代を生きていく子どもたちには、将来起こり得る問題を主体的に受け止め、よりよい解決に向けて、創造的に立ち向かってほしい。この願いをもつとき、最後までやり抜くための「自信」や「忍耐力」、他者と協働的に取り組むための「共感性」や「協調性」など、これまで以上に必要となる資質・能力があると考えた。このような資質・能力に溢れた子どもたちが、自分の手で生活を切り拓いていこうとたくましく生きていく姿を、「豊かに生きる」姿と考え、研究を進めてきた。

II めざす子どもの姿

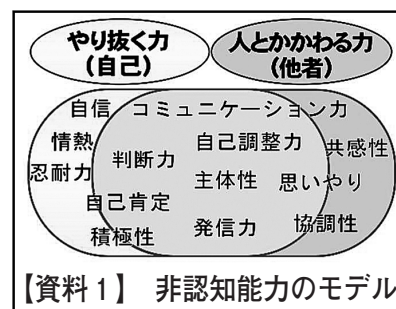
大槻(2022)では、「豊かに生きる」姿を追い

求めたとき、問題解決学習で育まれる教科・領域の学びに関する資質・能力を「教科・領域特有の資質能力」、人間性に関する部分を「非認知的能力」として整理した。そして、生活に生きてはたらく力にするためには、子ども自身が二つの資質・能力の高まりの理由や過程を認識すること、つまり自己の成長を自覚することが必要である。そうした経験を積み重ねることが「豊かに生きる」ことにつながると考えた。そのために、単元構想の段階から、二つの資質能力の高まりとともに単元内で影響し合う場面を見通し、必要なタイミングで教師支援を講じることによって子どもの追究を支えていくことが大切であると考えた。

III 「豊かに生きる」ために必要な二つの資質・能力

1 非認知的能力

大槻(2022)では、非認知的能力を、「やり抜く力」と「人とかわる力」に分類した。やり抜く力は、問題解決に向けて最後まで追究



し続ける、自己に関する力である。人とかかわる力は、仲間の考えを理解したり相手を意識した視点で考えたりする、他者に関する力のことである。「自信」や「共感性」のように、主に自己または他者に関する部分が多いものもあれば、「自己調整力」や「発信力」のように、自己と他者の両方に関係するものもあることがわかってきた。「やり抜く力」と「人とかかわる力」は、互いに高め合ったり影響し合ったりする相関関係にあるといえる。こうした非認知的能力が影響して、追究が深まっていくと考えている。

2 英語科の教科・領域特有の資質能力

大概(2022)では、「教科・領域特有の資質・能力は、各教科・領域特有の、ものの見方や考え方、感じ方をはたらかせ、創造的に判断したり、工夫したりする力である」とした。また、英語科では、外国の人との交流を通して、英語でのコミュニケーションに対する見方や考え方、感じ方をはたらかせ、目的や場面、状況等に応じた英語表現や伝え方を考え、他者に配慮しながら伝え合うことができる子どもの姿を求めていく。英語科で高めたい「教科・領域特有の資質・能力」を次のようにおさえた。

「伝えたい」「知りたい」思いを、伝え方を考えて表現し、コミュニケーションを豊かにする

「伝え方を考えて表現」……コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、効果的な英語表現や伝え方を考えていくこと

「コミュニケーションを豊かにする」……外国の人と意思疎通を図るため、外国語の背景にある文化や習慣への理解を深め、外国の人の理解を確かめながら話したり、話を共感的に受け止めたりするなど、他者に配慮しながらコミュニケーションスキルを拡げていくこと

※コミュニケーションスキル

コミュニケーションを図るうえで必要となる、英語表現・内容や発音といった「言語的伝達手段」と、伝え方や外国の人との接し方のよう、言語を伴わない「非言語的伝達手段」の両方を表す

IV 英語科の問題解決学習の流れとその過程における「非認知的能力」と「教科・領域特有の資質・能力」の高まりと影響

子どもたちは、ふだんの生活のなかで、外国語や外国の文化に無意識にふれている。そのような子どもたちが、外国の人たちと交流する機会を得ると、その機会を生かして仲を深めるために、「自分の考えを伝えたい」「外国の人のことを知りたい」などの思いを抱く。必要な英語表現を調べて練習をしたところで、交流の場面を想定したシミュレーションを行う。活動を通して、うまくいったことや、足りなさなどに対する気づきを仲間とかかわらせることで、今後考えていかなければならないコミュニケーションスキルが明確になり、問いが生まれる。

問いをもった子どもたちは交流の目的に応じた英語表現や伝え方を追究していくが、母語ではない英語でのコミュニケーションに不安を感じることもある。そのため、追究を進めるための粘り強さ、主体性や自信が必要となり、子どもたちが段階的に英語表現を身につけられるように、教師は朱記や対話で追究を支えていく。追究の過程でグループ活動を行う場面では、仲間の考えを理解しようとする共感性がはたらき、自らのコミュニケーションスキルを拡げようとする姿が見られる。

【事例 6年生単元「パリス校に岡崎のお菓子を届ける附属小ボックス」】

「岡崎の魅力が伝わるように、英語表現や伝え方を考えたいな」と問いをもった子どもたち。考えた英語表現で外国の人に興味をもってもらえるか不安を感じていたM児をとらえた教師は、仲間の伝え方に目を向けることができるようにグループ活動を取り入れた。M児は、写真を使って製造者や原材料を説明する仲間の伝え方に共感をはたらかせ、お菓子のデザインが徳川家康や校章と関係があり、歴史的に意味があるということを知りやすく伝えようと、三つの関係をポスターにまとめた。イラスト見せ、ジェスチャーを使いながら伝えようとコミュニケーションスキルを拡げることができた。

※非認知的能力が教科・領域特有の資質・能力に影響した場面

仲間と練習し、外国の人に伝えられそうだと手ごたえを感じている姿が見られたときに交流会を行う。表情を見たり、感想や質問を聴いたりすることで、「外国の人が困ったときの声のかけ方を考えていなかった」「もっと詳しく日本のことを伝える必要がある」など、英語でのコミュニケーションに対する見方や考え方、感じ方がはたらく。交流を振り返り、具体的な場面や状況における英語表現や配慮の足りなさに気づいたタイミングで追究を見直すかかわり合いを行う。ここでは、仲間の考えを取り入れようとする共感性や、自分の考えを見直そうとする自己調整力がはたらき、新たな視点からコミュニケーションスキルを考えようとする姿が見られる。

【事例 6年生単元「外国の人と投扇興大会」】

交流後の追究を見直すかかわり合いでは、外国の人が投扇興を失敗したときや困っている場面で、相手への気遣いが必要だという視点が増えた。覚えたことばをただ単に伝えるだけでなく、うまくできたら「It's amazing!」、失敗したら「Keep trying!」と声をかけるなど、外国の人の気持ちを考え、具体的な場面に応じて英語を使い分けようと、自己調整力をはたらかせ、自分の考えを見直した。

※教科・領域特有の資質・能力が非認知的能力に影響した場面

必要となる英語表現を調べ、練習する時間を確保した後、追究してきたことを試して客観的に見合うことができる場を設定する。互いの英語表現や伝え方の工夫を見ることで共感性が高まり、自分にはない視点からコミュニケーションスキルを考えようとする。練習を重ね、これなら交流が成功しそうだとする姿が見られたところで、外国の人と交流する場を設定する。交流後に、核心に迫るかかわり合いをすることで、「自分の伝えたいことが表現できた」「外国の人の思いを理解することができた」という体験から、効果的なコミュニケーションスキルを実感でき、達成感を味わう。粘り強く追究したことによって得

られた喜びから自信や主体性が高まり、今後も英語でコミュニケーションを図ろうとする意欲を高めていくのである。

このような問題解決学習のなかで、非認知的能力が子どもたちの追究に影響する。非認知的能力がはたらくことで教科・領域特有の資質・能力が高まったり、非認知的能力そのものが高まったりする。非認知的能力と英語科における教科・領域特有の資質・能力を高めた子どもたちは、生活のなかにある外国の文化により興味をもち、外国の人とかかわるためにさらに英語を身につけようとしたり、外国の人に配慮しながら意思疎通を図ったりすることができるようになるのである。

V 英語科単元における実際の姿

1 K児をとらえ、願いをかける

5年生になり、世話係に立候補すると語ったK児だったが、「どうしようかな」と何度も声を出し、そのことばに仲間がどう反応をするかを気にしながらも、最後まで立候補しなかった。昨年度の担任の話から、自分に対する自己肯定感や自信がもてずにいる面があり、仲間認められることで自信をもって動き出せる部分があることがわかった。立候補の場面では、仲間から「やってみたら」という反応が返ってくるのを待っていたのかもしれない。

今日は2年生にあげるカード（ぼくは、ちょうちん）を作りました。ぼくは工作が意外と好きなので、どんどん案が出てきたので、作っていたらただのカードじゃおもしろくないと思い、作ってたじぐざぐをまとめてちょうちんを作ったらひでのり君が、「K児って、工作とくいだよな〜」って言ってくれてちょっとてれました。

（4月14日 K児の生活日記）

ペアとの出会いを楽しみにしていたK児は「ただのカードじゃ」と、ペアを喜ばせるという目標に向かって、自分の思いをもち、試行錯誤をしながらカードの作成を進めた。仲間ほめられることで、より意欲的に作り続け、仲間とペア交流の内容を話し合う場面で

は、積極的に考えを伝える姿を見せた。目標に向かって自分なりの思いをもって取り組むことができるK児だからこそ、仲間と考えを認め合うことで、その思いに自信をもって伝えることができるようになってほしい。

K児は昨年度の6年生がアメリカのバリス校と交流をしたことをうらやましがっていた。実際にどのように感じていたかを知るために、感想を読み返してみた。

岡崎のお菓子のことを英語で伝えていてすごいなあと思いました。バリス校に附小のことや岡崎のことを教えたいと思いました。僕も英語で外国の人といっしょに活動したいな。この伝とうを守っていきたいです。

(3月7日 6年生のプレゼンを見た感想)

「すごいなあ」と、英語を話す姿にあこがれ、「僕も」からは、外国の人と一緒に活動したいという思いがあることがわかる。しかし、英語に対しては苦手意識があって自信がないと話し、授業では覚えたことばを一方向的に伝えるだけで満足し、自分の伝え方や、相手の反応にまで目を向けようという意識はまだ見られない。目的意識をもって外国の人と交流する活動において、場面や状況に応じて、相手に配慮しながら英語表現や伝え方を考えることができるようになってほしいと願った。

以上のことから本研究で高めたい二つの資質・能力を以下のように設定した。

【高めたい非認知的能力】

- ・ 仲間の考えのよさを取り入れながら考えを整理し、自分の考えに自信をもって発信することができる。

【高めたい教科・領域特有の資質・能力】

- ・ 相手や気持ちや状況に目を向けることで、コミュニケーションの目的、場面や状況に応じてコミュニケーションスキルを上げることができる。

2 教材を選定し、二つの資質・能力の高まりを見通す

目標に向かって粘り強く取り組み、外国の

人と交流したいという思いがあるK児。そんなK児が、交流の目標を達成するために、相手の状況や気持ちに目を向けることで、相手に配慮した英語表現や伝え方を考えることができるだろう。さらに、仲間とシミュレーションを行うことで仲間のよさを感じ、コミュニケーションスキルを上げ、自信をもって伝えることができるのではないかと考えた。そこで、外国の人に伝えるベーゴマ遊びを教材に選定した。外国の人とベーゴマで遊ぶためには、巻き方、回し方などを教える必要がある。また、相手がうまく回すことができない、失敗して意欲を失うなど、相手の気持ちや状況に配慮した英語表現や伝え方を考えなければならない。ベーゴマをうまく回せるようになると楽しいということを伝えたいという思いが粘り強く追究を進める力になるだろう。また、伝わったという達成感が自信を高めることにつながり、二つの資質・能力が高まっていくだろうと見通した【次頁図2 単元構想図】。

3 K児の追究における二つの資質・能力の高まりと影響と分析

教科・領域特有の資質・能力と非認知的能力の両面における子どもの分析と教師支援のあり方」を探るなかで、二つの資質・能力が、特に影響し合って大きく高まるのは、「追究を見直すかかわり合い」の前後から、「核心に迫るかかわり合い」の前後の場面であることがわかってきた。「追究を見直すかかわり合い」の前後では、自分のこれまでの追究を見直したり、仲間の追究に目を向けたりして、困り事や安易な満足といった追究における壁を乗り越え、再び勢いよく追究に向かう姿が見られる。また、「核心に迫るかかわり合い」の前後では、互いの追究を分かち合ったり、追究内容や自らの追究に価値を見いだしたりする姿が見られる。こうした過程があるからこそ、二つの資質・能力が大きく高まっていく。

【図2 単元構想図】

5年英語科単元 附小ベーゴマ倶楽部 伝えたい ベーゴマの楽しさ

Let's enjoy playing with small spinning tops -Beigoma Game- 単元カリキュラム (19時間完了)

○ひとり調べの時数 ◎かかわり合いの時数 問い ◆ほりおこし ◇事前学習

【単元前の子どもの姿】

・仲間とかかわることに楽しさを感じており、他者のために活動しようとする子ども。
 ・外国人の人と交流することに興味があり、日本の遊びの楽しさを伝えたいという思いがある子ども。

[非認知的能力にかかわる教師支援]

[教科・領域特有の資質・能力にかかわる教師支援]

- ◆ ペア交流を振り返り、相手のことを意識して活動を考えてより楽しんでもらえるという意識をほりおこした。
- ★1 英語で考えることに対して不安な姿が見られたときに、考えがまとまるように対話を行った。
- ★2 説明文ができたところで、共感性をはたらかせ、自分にはない仲間の工夫に気づけるようにするために、説明文をタブレットで共有できるようにした。
- ★3 仲間とのシミュレーション後に、コミュニケーションスキルを上げ、自信をもつことができた姿を朱記や対話で認めた。
- ★4 交流後に、今まで追究してきたことが伝わったと、自信を高めた姿を朱記で認め、さらにその成長を実感できるように対話を行った。
- ★5 コミュニケーションスキルの拡がりを実感したところで、非認知的能力の高まりを自覚できるように、動画で自分の発表の様子を見た後で追究を振り返る時間を設けた。

外国の人とベーゴマで遊ぶよ

・外国の人にもベーゴマで遊ぶ楽しさを伝えたい
 ・巻き方や回し方を教えるよ
 マイク先生とベーゴマで遊んだよ ※1 ②

・巻き方は難しいからくわしく教えた方がいいよ
 ・練習した英語だけだと難しいな
 問いを生むかかわり合い

英語表現について 伝え方について ①

・できないときに励ます声かけをしたいな
 ・相手の様子を見て、ジェスチャーも使うよ
 ・楽しくできるまで相手のペースに合わせて教えるよ

外国の人にベーゴマの楽しさを伝えたいな

英語表現や伝え方 外国の人との接し方 ④

・like this で見本を見せながら一つずつ教えるよ
 ・Keep going!や Try it again! を使い分けるよ
 仲間の説明を見るよ ★2 ※2 ②

・相手を見たりジェスチャーを使ったりするといいな
 追究を見直すかかわり合い

<どうしたらベーゴマの楽しさがもっと伝わるかな>
 英語表現や伝え方 外国の人の反応や質問から

・1, 2, 3 release and pull で投げて教えたよ
 ・相手が興味があることを調べて教えたいな ※3
 外国の人の視点から相手が興味のあることも伝えるといいな

真剣勝負がしたい 歴史や思い ③

・こつを教えるよ
 ・pull quickly で強く回せるように教えるよ
 ・歴史やベーゴマを専門に作る日三鑄造所の人の思いも伝えたいな ★3 ※4
 核心に迫るかかわり合い ★4

<どうやってベーゴマの楽しさを伝えたかな>
 英語表現・伝え方 外国の人の視点

・相手の様子を見ながらジェスチャーも使ってこつを伝えることができたよ
 ・心を通わせるために声かけや興味があることを伝えることが大切
 外国の人を意識してわかりやすく伝えることが大切だね

学びを振り返るかかわり合い ★5 ※5 ①

仲間からの学び 自分の成長 英語の学び

・仲間のおかげでよりよい説明ができたよ
 ・もっと自分の考えを知ってみたい
 ・外国の人の視点から英語表現を工夫できたよ

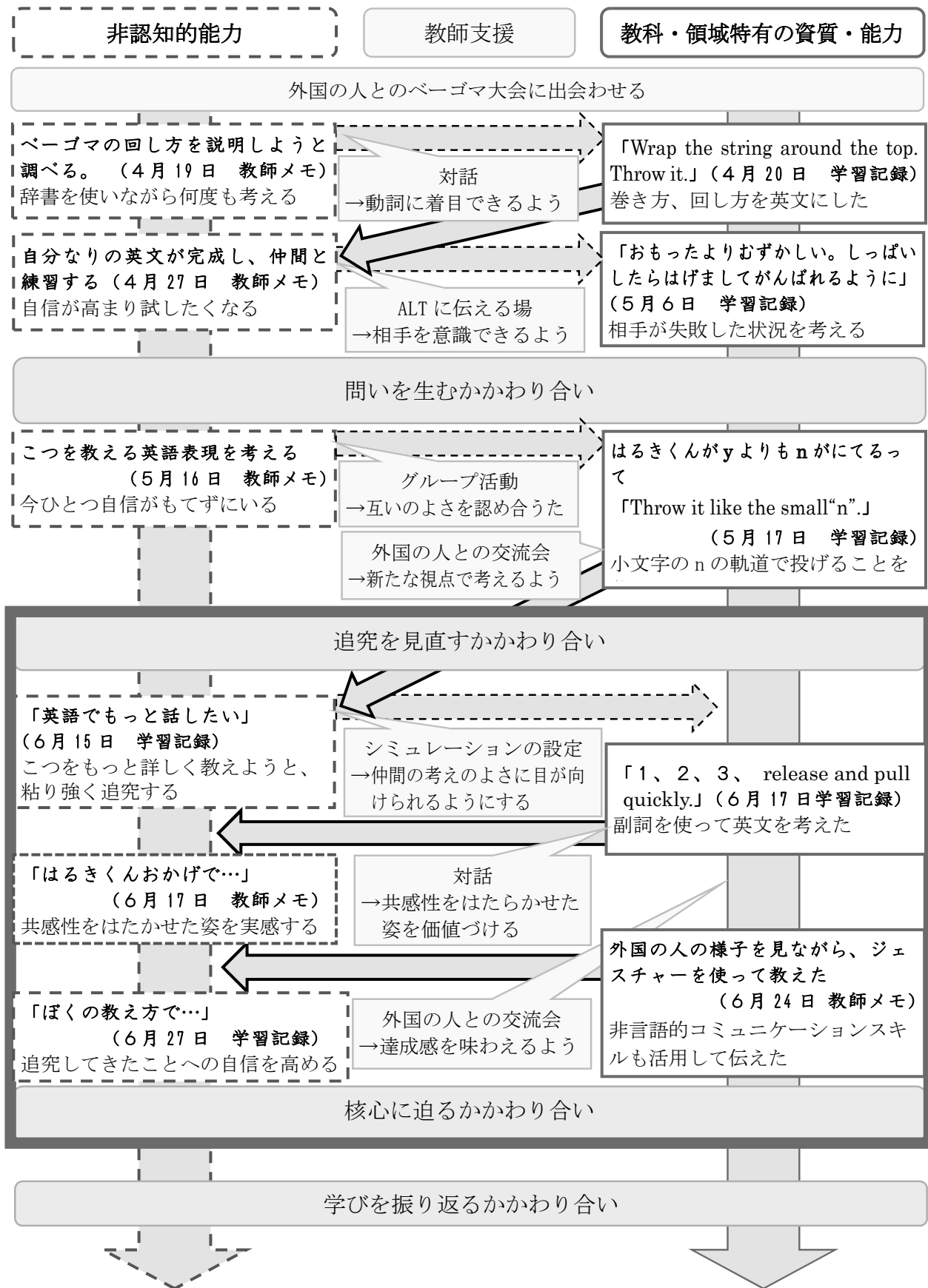
- ◆ 昨年の留学生交流会の様子を見ることで、外国の人は日本の文化に興味があり、伝えることで楽しんでもらえるという意識をほりおこした。
- ※1 追究をし始めたところで、不足している点に具体的に気づけるように、ALT に伝える場を設定した。
- ※2 仲間の考えに興味を示したところで、自分にはないコミュニケーションスキルに目が向くように、お互いの説明を見合ったり聞きあったりする時間を設けた。
- ※3 状況に応じたコミュニケーションスキルを考えようとする意識を高めるため、反応や質問に目を向けている意見を取り上げた。
- ※4 交流前に、コミュニケーションスキルを上げることができるよう、シミュレーションの場を設定した。
- ※5 外国の人に伝わったという達成感を味わったところで、有効だった英語表現や伝え方を実感できるように振り返る場を設定した。

【単元後の子どもの姿】

・仲間の考えを取り入れながら自分の考えを整理し、自分の考えに自信をもって発信できる子ども。
 ・相手の気持ちや状況に目を向けることで目的・場面・状況に応じたコミュニケーションスキルを拡げることができる子ども。

本単元のK児の追究における二つの資質・能力の高まりと影響は、次のとおりである。

【図3 追究における二つの資質・能力の高まりと影響】



ここからは、K児が、どのように英語でのコミュニケーションに対する見方や考え方、感じ方をはたらかせ、二つの資質・能力を高めていったのか、また、教師が、二つの資質・能力の高まりを見通したうえで、子どもどのような意識をとらえ、支援を講じることによって二つの資質・能力がどう影響し合って高まったのかについて、前頁の図3で示す太枠の過程を中心に述べる。

(1) 仲間の考えにふれ、自らの考えを上げたK児

「外国の人にベーゴマの楽しさを伝えたいな」と問いをもった子どもたち。そのなかでK児は、真剣勝負をして勝つ楽しさを味わってもらうために、回し方のコツを伝えたいと考えた。アルファベットのnの軌道を意識して投げてもらおうと、“Throw it like the small n.”という英語表現を考えました。これならコツが伝わりそうだと満足したK児をとらえた教師は、自分の追究の足りなさに気づけるように、留学生との交流会を設定した。交流会では、練習した英語表現を伝えても、留学生がベーゴマを離すタイミングがつかめず、上手く回せずに困っている様子を目の当たりにした。また、励まそうとはするものの、うまく言えず、様子を見ている姿があった。K児の自信がゆらいだ姿をとらえた教師は、ここで追究を見直すかかわり合いを設定することで、仲間の考えに耳を傾け、留学生の状況や気持ちまで意識することができるのではないかと考えた。

S児：児童Yは、体の表現がうまくて、そうやって外国の人にも手で説明すれば伝わると思います。—(略)— 実際にやってちょっとできないところを一緒に手伝いながらやって言ったほうが1回で伝わると思います。

T：Y児はどんなこと考えてやったの？

Y児：僕は英語でうまく伝わらないときは行動で示したらいいんじゃないかと思って、こうやってベーゴマが台の中心に来たときに引くっていうのを見せながら手でやりました。そういう行動のおかげで笑顔になったり伝わりやすくなったから、よかったんじゃないかなと思いました。

K児：Y児が言ったジェスチャーで教えるのがいいと思います。チームで外国の人が何をやっているかわかると思うから、今はこういうジェスチャーをやった方がいいとかそういう感じで。

(6月13日 追究を見直すかかわり合い 授業記録)

かかわり合いのなかで、仲間の非言語的コミュニケーションのよさに着目していたY児に聞くと、「うまく伝わらないときは行動で示したら」「こうやって」と、実際にジェスチャーを用いたときの状況を説明した。ここでK児を指名すると、「今はこのジェスチャーをやった方がいいな」と語り、相手の状況に合わせてジェスチャーを使うことの必要性に目を向けた発言をした。これまでは、あらかじめ練習した英語表現を用いて説明していたK児だったが、教師の意図的な指名によって仲間の考えに共感したことで、追究の方向性がはっきりとし、「もっとしゃべりたい」と意欲を高めた。こうした共感性が影響して、留学生の状況や気持ちに応じたコミュニケーションスキルが必要であると考え、教科・領域特有の資質・能力を高めたのである。

(2) コミュニケーションスキルを上げるK児

追究を見直すかかわり合い後、相手が失敗したときには、“Try again. ‘You can do it.’” うまくできたときには、“Wow! It’s amazing!”など、相手の状況や気持ちに応じて声をかけようと、表現集を作成した。K児は、1回目の交流会で、“Throw”という動詞で投げ方を教えていたが、それだと実際にベーゴマを台の上に投げ入れる動作と異なり、留学生にベーゴマを離すタイミングが伝わりにくいと感じていた。そこで、ベーゴマを離して、その瞬間に引くという動作イラストに書き、“release and pull”という英語表現で教えようと考えた。新たにイラストを用いて教えようと勢いよく追究するK児をとらえた教師は、主体性を高めたこの状況なら、より仲間の英語表現にも目を向けられると考え、交流会のシミュレーションの場を設定した。このなかでK児は、H児

が強く回すコツを伝えるために“strongly”という副詞を用いていることに気づき、その有効性に着目した。そして、ベーゴマを離れたタイミングで「素早く引く」ということを伝えるために、新たに“quickly”を用いた英語表現を考えた。ここでは、H児の考えに対する共感性がはたらいたことで、教科・領域特有の資質・能力を高めたのである。ここで教師は、共感性を高めた姿を対話で認めた。また、このタイミングで外国の人と交流をすれば、追究してきたことを伝えることができたという達成感を味わい、有効にはたらいたコミュニケーションスキルを実感することができると考え、再度外国の人と交流する場を設定した。

2回目の交流会でK児は、投げる手の動きを示しながら、“1、2、3、release and pull quickly.”と、ベーゴマを離すタイミングを伝えた。また、留学生が失敗したときは、“Try again!”と励まし、うまく回せたときには、“It’s amazing!”と一緒に喜んだ。ベーゴマを離すタイミングがうまくつかめるようになるまでK児は、「素早く引く」動作と英語表現を交えて、何度もコツを伝える姿を見せた。交流会を通して、留学生の状況や気持ちに応じたコミュニケーションができるようになった。

ぼくの教え方で回せるようになったのでとてもうれしかったです。1・2・3もいっしょに言ってくれて、“pull quickly”とイラストがよかったです。前よりもはやくコツをつかんだから、いっぱいしょうぶができました。歴史にもきょうみをもってくれました。ぼくはまた、世界にベーゴマをあそんでくれる人をふやしたいです。（6月27日 K児の学習記録）
※真剣勝負をするために、ずっと考えてきた教え方が伝わってすごくうれしいね。

交流会後の振り返りには、「ぼくの教え方で」と記述し、伝わったことを実感し、追究してきたコミュニケーションスキルに対する自信を高める姿を見せたのである。

VI まとめ

K児は、ベーゴマの楽しさを伝えるために、

外国の人にコツを教えようと、英語表現や伝え方を追究してきた。交流会後にK児の自信がゆらぎ、追究に行き詰まった姿をとらえた教師は、追究を見直すかかわり合いを設定した。ここでの意図的な指名により、仲間の考えに共感したことで、留学生の状況や気持ちに応じたコミュニケーションスキルが必要であると考え、ジェスチャーを用いるなど、教科・領域特有の資質・能力を高めることができた。さらに、主体性を高めた姿が見られたところで、交流会のシミュレーションの場を設定すると、副詞を用いた仲間の英語表現のよさに共感し、ジェスチャーを生かす英語表現を考える姿を見せた。2回目の交流会では、ジェスチャーと英語表現を交えて回し方を伝えるなど、コミュニケーションスキルを上げ、自信を高めるK児の姿を引き出すことができた。このように、追究を見直す場面から核心に迫る場面において、非認知的能力と教科・領域特有の資質・能力を高めたり、影響を促したりするための教師支援を講じたことで、K児の二つの資質・能力は、互いに影響しながら高まっていった。

英語科では、子どもたちが母語ではない英語で伝えることに不安を感じたり、自信がゆらいだりすることがある。追究に行き詰まったり、子どもたちが困り感をもっていたりする場面で、子どもたちの二つの資質・能力が、今どういう状態なのかを見極め、コミュニケーションを豊かにする子どもの姿に迫るために、適切な教師支援を講じていきたい。

【引用・参考文献】

- ・文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』東京：開隆堂出版
- ・大槻真哉（代表）（2022）「豊かに生きる－問題解決学習における「非認知能力」と「教科・領域特有の資質・能力」の高まりの影響－」生活教育研究第73号、愛知教育大学附属岡崎小学校